



<巻頭言>新・人間関係学科のあらまし

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村田, 修身 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/1768

新・人間関係学科のあらまし

人間関係学科主任 村田修身

1. 新・人間関係学科各専攻の概要

1999年度より人間関係学科が新しく生まれ変わったが、それは単に従来3専攻で構成されていたものを5専攻に増やしたというに止まらない。本学科の研究理念は丸山学部長が述べられているとおり、〈人間関係の重層的かつ構造的な把握、および人間関係の変動の解明〉であり、この理念の実現とその教育体制の充実を図った結果、必然的に生まれてきた形が5専攻領域の構成であった。すなわち、「人間学」「社会学」「教育学」「心理学」「スポーツ文化」の5専攻体制〜たとえて言えば「五弁の椿」〜である。以下、各専攻の概要を紹介しよう⁽¹⁾。

1)人間学専攻

近代以降の自然科学領域の急速な発達により、人間の生活環境が大きく変化し、さらに多元文化への接触や情報革命とも言える技術革新のなかで、社会的・文化的環境も重層的に変容しつつある。過去においては自明なものと思われていた常識が通用しなくなった現代社会にあっては、従来の人間像も揺らいでおり、人間生活のあらゆる場面で人間性の疎外が指摘されている。こうした状況を的確に認識し、新たな人間像を模索するためには、人間存在を根底から、しかも多面的に探求する必要がある。

人間学専攻では、このような要請に応えるべく、人間存在論・規範論・精神分析学的認識論・文化受容論などの領域にわたる科目を配し、他の4つの専攻との連携により、これまで以上に学際的かつ統合的な教育研究を展開する。それによって、現代における人間と社会との関わりを、根本的に、しかも複眼的な視点からの的確に認識し得る人材を育成する。また、人間学専攻の取り組む諸問題は、現実に社会生活を営んでいくなかで、その重要性と必要性が改めて認識されるものである。生涯学習の社会的重要性が高まっている今日、本学科はこうした社会人層の需要にも応えるものであるが、なかでも本専攻はその潜在的要求に対応する理念的中核をなすものである。

2)社会学専攻

20世紀を特徴的に表すものとして、科学技術の飛躍的な発展と急激な工業化に伴う機械化をはじめ、都市化、大衆化、あるいは情報化といったいくつかの現象を挙げることができる。われわれ

これは現在、こうした劇的に変容する社会の中でさまざまな問題を抱えつつ生きている。身近なところでは、地域社会や家族の在り方が変わり、より地球的なレベルで見れば、民族対立や国家・地域間の利害対立や南北問題など、さまざまな事柄がわれわれの日常生活に直接間接に影響を及ぼしている。

社会学専攻のねらいは、このような変動する現代社会の構造を理解するため、学際的協力によって新しい分析枠組みを生み出し、それに基づいて実践的知性を持ち、社会のニーズに応え得る人材を育成することである。

学習カリキュラム的には、従来の巨視的社会学および微視的社会学の枠組みを基本にしながら、法・政治・経済・宗教といった諸制度の視角からも現象に切り込むことのできる幅広い視野を身につけることが目指されている。また、学科内の他の専攻との緊密な連携によって、さらに視点を高め、広げることが可能であることも本専攻の特色であると言えよう。

3)教育学専攻

現代社会は、経済の高度成長による空前の物質的繁栄を見たあとに、ビッグバンにもなぞらえられる社会的基盤が根底から覆えるほどの原理的・構造的転換の時代を迎え、数々の問題を抱えている。そして、その中でも教育に関わる問題は最重要課題であるとの認識が漸く広まりつつある。「それぞれの国と時代の教育は、政治・経済・文化の発展段階と課題といった諸変数の関数」⁽²⁾であるから、教育の問題は現代社会にあっては、その深刻さや複雑さ、多方面への影響などが殊に大きいものとなっている。

教育の諸現象の理解のためには、多角的なアプローチによる包括的かつ長期的な視野からの専門的探究が必要である。本専攻は、人間にとって普遍的な教育という営みを多面的に深く理解し、実践する資質を培うために、また不登校やいじめなど、学校や家庭・社会における子どもをめぐる今日的で緊急の課題に具体的に対処できる能力を育成するために、また、情報化、高齢化など変化の激しい時代に求められている生涯学習社会の確立に貢献できる人材の養成のために置かれている。

4)心理学専攻

人間の知的探求の営みは、一方で「もの」の世界を客観的に追究し、遂には宇宙空間にまで向かい、その成果は「もの」についての驚異的な量の知識を蓄えた。他方、人間が「もの」として「対象化」されるような科学の発展の反面、「こころ」についての謎は逆に深まってさえいるように見える。現代は人間の内なる宇宙である「こころ」に向かって、かつてないほどの関心が寄せられている時代である。その背景として、教育の現場におけるいじめの問題や不登校など、解

決を迫られている数多くの現実的な諸問題があり、かつては人々を支えてきた地域共同体などの抛り所喪失という状況がある。さらに今は脳死移植や遺伝子操作などの新技術が次々に現れて、われわれに「人間とは」「自己とは」「こころとは」何かと問いかけてきている。

心理学専攻は、このような諸問題について理解を深め、少しでも解明・解決に向けて取り組んでいける人材を育成するためのものである。本専攻は心理学の特定の分野に偏らない、バランスのとれた総合性を特色とする。認知心理学・発達心理学・社会心理学・臨床心理学のそれぞれに専任の教員を配し、基礎的領域から企業組織や心理臨床までの幅広い問題領域をカバーする専攻科目群を置き、また学生の自主的な学習、研究のために不可欠な実験法・検査法・統計法に関する科目も充実させている。

5) スポーツ文化専攻

1997年に保健体育審議会は「生涯にわたって健康な生活を送るためにヘルスプロモーションの理念に基づいて、自らの健康問題を認識し、健康の増進を図っていく不断の努力を求め」て答申を行った。大阪府ではすでに、1996年1月に「大阪府生涯スポーツ社会づくりプラン」を策定し、「スポーツ関連施策関係部局等連絡会」を発足させるなど府民の多様なスポーツニーズに応えるために取り組んでいる。いま緊要な課題とされるのは、地域に密着し、スポーツ集団のネットワークづくりを担える指導者や、プランナー、オーガナイザーの資質を持った人材の養成であり、とりわけ女性のスポーツ指導者養成の必要性が高い。

本学では、1993、94年度の文部省科学研究費を受けて「生涯スポーツ指導者に関する研究」を生涯学習研究会の研究テーマとして取り上げた。また、人間関係学科においては従来より人間社会におけるスポーツ文化の重要性を認識し、各専攻共通科目として「スポーツと人間」「人間関係学特殊講義Ⅰ」を開講してきた。しかし、科目開設だけでは社会の強い要請に応えるには不足であることは否めない。そこで今回新たに「スポーツ文化専攻」を設置し、現代社会におけるスポーツ文化の意義を原点とする、スポーツコミュニティづくりに関する幅広い知識と実践力を備えた、女性スポーツ指導者の育成を図ることとしたものである。

2. 人間関係学科 5 専攻のコア～「五弁の椿」の花の芯～

さきに、人間関係学科の各専攻を「五弁の椿」にたとえてみた。それは、一枚一枚の花びら（各専攻）がそれぞれ分離して相互に脈絡がない状態とは全く異なることを言いたかったのである。では、その花の芯は如何なふうになっているのかという疑問も出されるかも知れない。私見では、それは「新しい時代に相応しい教養」であると言ってよかろうと思う。以下、「教養」に

ついて少々述べてみたい。

大学は、「学校教育法」(1947)では「學術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」⁽³⁾と規定されている。これは、教育基本法の本質（特に第1条および第2条）を具現したような形である。すなわち、「人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、」「實際生活に即し、」「文化の創造と発展に貢献する」ような学問を求められており、新制大学の発足と共に置かれた「一般教育」は、まさにその根本精神（特定の専門分野にのみ偏りすぎず、調和均整のとれた人材の育成）に合致するものとして期待されていたと言えよう。

しかし、大学の一般教育に示されたものは、20世紀の教養というよりは、むしろ中世的なりべラル・アーツ（七自由科 *septem artes liberales*）のような印象を与えるものであり、人文・社会科学・自然科学の領域の中から単位の数合わせのためにばらばらに選ぶもののように受け取られていったとすることができる。このことは、昭和31（1956）年に制定された文部省令の「大学設置基準」からも窺うことができるであろう。そこでは「一般教育科目は、その内容により、人文科学、社会科学及び自然科学の三系列に分ける。」と定められ、一般教育に関する授業科目は次のように例示された⁽⁴⁾。（なお、筆者はHumanitiesを Scienceとすることに抵抗を感じ、通常は「人文科学」と言わずに「人文」としている。）

1. 人文科学系 哲学、倫理学、歴史、文学、音楽、美術
2. 社会科学系 法学、社会学、政治学、経済学
3. 自然科学系 数学、物理学、化学、生物学、地学

こうして、殊に高度経済成長の時代において、「一般教育」はその本来の理念から大きく外れて、役立たずの無用の長物のようにもみられることとなる。以下、少々長くなるが、岡田渥美氏の見解を引用する。

「全体的・調和的な人間の形成を志向した『一般教育』本来の目的や理念は、科学技術の飛躍的な進歩と経済の高度成長による空前の物質的繁栄のなかで、実質的には全く風化し破綻してしまっただけとも言っても過言であるまい。」「現在これほど教育の必要が叫ばれ、教育をめぐる殆どあらゆる問題が喧しいまでに論議され、おびただしい教育的努力が各方面で進められていながら、しかし肝心要めの『いかなる人間を育成するか』『どのような人間を形成・陶冶するのか』という問題になると、いっこう明確なイメージが描けない。換言すれば、教育並びに教養の目標となるべき人間像が、社会の通念として存在しなくなっている。というのも、現代は、社会も文化も人間も、すべてがあらゆる面でドラスティックな変化を遂げつつある『変革の時代』であり、過去においては自明であり安定していた在来の『常識』や『価値観』や『世界観』が、根底から覆えるほどの社会全体の原理的・構造的転換の時代だからである。」⁽⁵⁾

ところが、1991年の「大学設置基準」の改訂により「一般教育」の規程が緩和され、単に「幅広く深い教養及び総合的な判断力を培い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮」するだけでよくなった辺りから、大学は「教養」から目を背けても許されるという考えを強めていったのではないか。情報技術の革新に先導されて社会が大きく変動しているとき、好ましい人間形成の在り方を示すことは困難である。しかし、いま、新しい時代に相応しい新しい教養が求められているのである。「人間であること」の意味、「人間として生きること」の目的が問われているのである。廣川洋一氏が「教養」にたいする期待は、大学外の現実社会において、むしろかつてないほどに強まっている⁽⁶⁾と述べているが、「学術の中心として」の大学の責務は重い。

古代ギリシアの教育は、「自由人」（政治的な場に関わる「市民」）の教育であるが、その経済社会は奴隷制度に基礎を置くものであるから、これをそのまま現代のわれわれの社会に当てはめることはできない。しかし、ギリシアの教育は単に市民生活のための技術だけではなく、人間として良く生きることを求めるものであった。その点は不易流行であろう。「有閑階級の観想的な生活」のためのものや、「琴棋書画」にのみ没頭するような類のものに墮することは論外であるが、筒井清忠氏も言うように、教養とは、実用的知識をこえたもの⁽⁷⁾である。ホワイトヘッドは、教養とは思考力の活動であり、また美と人道的感情に対する感受性⁽⁸⁾であるとして、ばらばらの知識を斥けるが、いまこそ、詰め込み的な知識の教授への反省が必要である。

また、人間を全体的に捉えていくこと。「あたま」と「からだ」に2極分化して、「合理的」の名の下に切り捨ててきたものを再び統合するところから積み上げていかなければならない。その意味でも、わが人間関係学科の目指すところが時代の要請に応えるものと期待されるのである。

3. 人間関係学科の基盤～「五弁の椿」の根～

以上、人間関係学科の5専攻の紹介に続いて、「新しい時代に相応しい教養」を本学科のコアとする私見を述べた。こうしてみると、そこには自ずと、本学の理念がわれわれの拠って立つ基盤として現れてくる。本学の前身・大阪府女子専門学校は大正13（1924）年4月に女性に「高等の学術技芸を授け、かねてその人格を陶冶する」ことを目的として創設された。そして、1991年9月には本学の将来計画の決定に際して、〈個人の自由な学習によって成熟する社会を実現するための学術・文化・教育の拠点〉と規定した⁽⁹⁾。

人文社会学部と理学部との2学部体制となった本学は、この人間関係学科を育む母胎になぞらえられる。その根底には、人間精神の偏りなき全面的・調和的発展を理想とするギリシアの教育に発する全人の陶冶の思想が流れている。そこには「理性」のみに偏りすぎないで、「人格性」を重視した、全体的・統合的視野が見えている。アフリカの諺に「この地球を大切にしなさい。

それは、あなた方が祖先から受け継いだものではなく、子孫から預かっているものだから」というのがあると聞き及ぶ。本学の理念は、こうした全宇宙的な視点とも響き合い、そこから、現代の昏迷を解きほぐし、「人間存在とは」何か、「教養とは」何かを問い直そうとする本学科の目指すところの源流が迸り出るように思われるのである。

【注】

- (1) 人間関係学科各専攻の概要については『大阪女子大学学部改組転換概要書』参照
- (2) 森口兼二編『社会教育の本質と課題』松籟社, 1989. p.19.
- (3) 「学校教育法」(1947)第52条
- (4) 「大学設置基準」(1956)第20条. これは文部省令以前に大学基準協会が定めた大学基準よりも科目数が少なくなっている.
- (5) 岡田渥美「教養—西洋思想史からの一考察—」『大学における教養教育の位置』京都大学教養教育研究会共同研究・第一次報告, 1994. p.56—57.
- (6) 廣川洋一『ギリシア人の教育』岩波新書, 1990. p.3.
- (7) 筒井清忠『新しい教養を拓く』岩波ブックレット, 1999. p.50.
- (8) Whitehead, Alfred North: *The Aims of Education and Other Essays*, 1929.
(森口兼二, 橋口正夫訳「教育の目的」『ホワイトヘッド著作集』第9巻, 松籟社, 1986. p.1.)
- (9) 大阪女子大学『現状と課題』1997. p.1.